

<はじめに>

近年、青年期や成人期になってから診断される自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder : 以下 ASD と略記)は、本来の症候に加えて環境への不適応などを誘因とする二次的な精神医学的・心理的問題を有することが多いと報告されている(Attwood, 1997, 2006; Tantam, 1998; 宮川, 2011, 2012; 齊藤, 2009, 2014)。そのため支援に当たっては、ASD 者の自己概念、対人関係といった問題を無視することはできない。これまで成人期 ASD 者のアタッチメントについての研究はほとんどない。そこで本研究は、成人期 ASD 者のアタッチメントの特徴を分析し、支援について検討することを目的とした。

<研究 1>

目的：自閉スペクトラム傾向(以下 AS 傾向と略記)とアタッチメントの関連を明らかにした。対象：首都圏の大学生 200 人に質問紙を配布し 151 部回収し(回収率 75.5%)、128 人分を分析対象とした。調査協力者に対し、研究目的、方法、研究参加の自由性、データ類の取り扱いについて説明し、協力の同意を得てから無記名で調査を行った。大正大学研究倫理委員会の承認を得た。

手続き：(1) 成人用自閉症スペクトラム指数日本語版(Autism-Spectrum Quotient ; 以下 AQ と略記)(若林・東條, 2004)：定型発達者を含む自閉症スペクトラム傾向を測定する尺度として信頼性および妥当性が確認されている(北添ら, 2009)。

(2) 一般他者版親密な対人関係尺度(the Experiences in Close Relationships inventory for the Generalized Other; 以下 ECR-GO と略記)(中尾・加藤, 2004)：親密性の回避(12 項目)、見捨てられ不安(18 項目)の 2 次元で構成されている。

結果：対象者を AQ 得点により AQ 高群(上位 25%)、中群、低群(下位 25%)に分類した。また ECR-GO の各尺度平均値を基準として、対象者をアタッチメント・スタイルごとに安定型、不安型、拒絶・回避型、恐れ・回避型と分類した。AQ 得点とアタッチメント・スタイルの関連を検討するために、AQ 中群を除いてカイ二乗検定を行なったところ、有意傾向が示された($\chi^2 = 7.084, p = .069$)。残差分析の結果、AQ 低群では安定型の人数が、高群では恐れ・回避型の人数が多かった。

考察：AS 傾向は、恐れ・回避型のアタッチメントと関連すると考えられた。ASD 児のアタッチメントについての先行研究と一致した結果であった。

<研究 2>

目的：成人 ASD 者のアタッチメントと対象関係について検討した。

対象：ASD 者 10 名 (男性 6 名, 女性 4 名)。大正大学研究倫理委員会の承認を得た。調査協力者に対し、説明文書・調査参加承諾書を提示し、研究目的、方法、参加への自由性、診療情報の参照、データの取り扱いについて、文書による同意を得た。

手続き：(1) 一般他者版親密な対人関係尺度(the Experiences in Close Relationships inventory for the Generalized Other; 以下 ECR-GO と略記)(中尾・加藤, 2004)。

(2) アタッチメントに関する半構造化面接：脅威場面における対人行動の有無，頻度，他者への接近の仕方や情緒的反応を尋ねた。所要時間は 30～50 分であった。

(3) ロールシャッハ・テスト(以下，Ror.テと略記)：施行・評価は片口法に準拠した。
結果：(1) ECR-GO と半構造化面接によるアタッチメント分類：他者を拒絶しているという感覚がなく他者との親密さがわからない 5 名を「不接近型」と命名し、他者に接近する際に恐れを感じている 5 名を「恐れ・回避型」とした。

(3) Ror.テ：「不接近型」と「恐れ・回避型」の変数を比較検討した。

結果：統計的分析では，各変数について Mann-Whitney の U 検定を行った。「恐れ・回避型」は，「不接近型」よりも，人間運動反応 M ($U=22.50$, $p=.035$)が有意に多かった。また、「不接近型」に個人的経験の引用，反射反応，立体反応を認めた。

考察：「不接近型」は，内的活動が不活発で，他者の情緒を仔細に感じ取ることや，他者の心理状態を推察することが難しいため，情緒的なアタッチメントを形成しにくく，他者と距離を取る傾向が強いと考えられた。「恐れ・回避型」は「不接近型」よりも，内的活動が活発で他者と情緒的交流をすることが多く，協働的な他者との関係を望んでいるが，迫害的な不安を抱きやすいため対人関係における葛藤が大きいと考えられた。

<研究 3>

目的：ASD 特性の理解と対人関係上の工夫を開発すること，自己理解を促進することを目的とした心理教育を行い，その効果を検討した

対象：研究 2 の協力者の中から 4 名（男性 1 名，女性 3 名）が研究に参加した。調査協力者に対し，説明文書・調査参加承諾書を提示し，研究目的，方法，参加への自由性，診療情報参照，データの取り扱いについて，文書による同意を得た。

手続き(1)心理面接：先行研究を参考に新たに作成した資料をもとに心理教育を行った。

(2)自己理解質問(Damon & Hart, 1988)：自己の様々な側面に及ぶ複数の質問を行うことで自己理解の内容を捉えるものである。心理面接前後に質問を行った。

結果と考察：心理面接前後の自己理解質問への回答を比較したところ，4 事例とも肯定的言及が増加していた。セラピストに対する情緒をアセスメントし，心理面接に活用することが重要であると考えられた。

<総合考察>

AS 傾向と恐れ・回避型のアタッチメントとの間に関連が認められた。また，臨床群の ASD 者の一部は従来のアタッチメント類型に当てはまらないことが明らかになった。ASD 者のアタッチメントには，情緒的応答性や，他者の心理状態を適切に推察するための心的機能が大きな影響を持ち，早期の対象関係が非常に重要であると推察された。今後はサンプル数を重ね ASD 者のアタッチメントについて縦断的に検討する必要があると考えられた。